# Aブロックの「歩」ベスト3です。

ふ？　ほ？　あるく　あゆむ。読み方自由の漢字お題でした。
あなたなら、どの作品を推しますか。
そして東工大生が1位に選んだのは・・・？

答えは作品のあとの講評にてどうぞ。

# あるかぶとむしの訓、辞

一歩、二歩、三歩、・・・・十一歩。

一歩、二歩、三歩、・・・九歩。

どっちが縦だか横だか分からないが、我輩は十一×九歩の透明な籠に買われているかぶとむしで、名を「めたび―」という。主人がつけた名だ。この透明な壁に囲まれて生きる生活に満足している。主人は毎日欠かさず森では決して食べられない栄養価の高いゼリーをくれるし、なんと我輩のためにすばらしいレディーまでもこの籠のなかにいれてくれた。そう、今横で一生懸命ゼリーを口に運んでいるのがそうだ。触覚の角度とかもうものすごく扇情的であろう？・・・

・・・、そして羽の艶がだな・・・、なに？そんな狭い籠の中で息苦しくないのか？かぶとむしとしてのプライドは無いのかだと？いきなり話が飛んだな・・。おぬし、我輩の話をちゃんと聞いていたのであろうな？まあよい。それならこちらも逆に言わせてもらおう。前々から尋ねてみたかったのだ。おぬしら人間は、歩数ではイライラしてとても測れないような広大な場所で暮らすことを強制させられたら息苦しくないのか？家が、さらにいうと自分の部屋の中が最も安らぐ場所ではないのか？うむうむ、そうであろう。同意がとれたところで、早速自分の部屋の歩数を測ってみるが良い・・・、十一×九歩分より大きな部屋に住んでいるものは相当少ないのではないか？そうだろう？つまりお主たち人間は、我々かぶとむしにその籠は暮らすには小さくないかと聞いておいて、そのくせ自分たちは我々よりもっと歩くスペースの少ない所に暮らして安らぎを感じているのだ。我ながら滑稽だとは思わないかね？

我輩の話はなかなか分かりやすかったであろう？目の前に、勝手に好きな料理を運んできてくれて、しかも異性まで言わずとも提供してくれる場所があるとする。その部屋の中でおぬしたちは自由だ。そんな部屋があったら入ってみたいとは思わないかね？・・・、そうだろう、思うだろう。人間の世界ではそのような生活ができるのはほんの一握りの者だけらしいからな・・。我輩はそんな場所で生活しているのだ。悔しかったら。今度生まれ変わったらまた人間になりたい。なんて、幼稚な、考えなしの意見は早急に撤回して、かぶとむしになりたいとでも願うが良い。我輩が言いたいのはそれだけだ。おっと、妻が呼んでいる。もう行かねば。

# 「歩」の風景

晴れた日は空を見上げ、雨の日には傘を差し、
紅い夕焼けを遠くに見て、夜の心地良い風を感じる。
楽しいときは前を向き、悲しいときは俯きがちに、
退屈なら辺りを見回し、気になれば後ろも振り返る。
嬉しかったら軽快に、お気に入りの歌を口ずさみ、
自然と歩幅も大きく、それでいて焦らない。
仲間たちとは笑いあい、好きな人とは手を繋ぎ、
道端の猫をやけに可愛く思い、散歩中の犬に心の中で挨拶する。
春は日差しを浴び、夏は日陰を探し、
秋は落ち葉を踏み、冬はポケットに手を突っ込んで首をすくめる。
道路の白いライン上だけを歩いてみたり、
隣を歩いている他人と勝手に競争してみたり、
意地悪して鳩を追っかけてみたりする。
前を行く人のタバコの煙が目に染みたり、
犬の糞にただならぬ恐怖を感じたり、
向こうから来る人と同じ方向に避けて、妙に気まずかったりもする。
そんなことをしながら、いろんなことを感じながら、
今日も僕らは、歩く、歩く、歩く、歩く。

A-10

# 片割れ

正直な話、この状況で希望を持てというのは嘲笑されているとしか思えなかった。

見舞い客が去り静寂が戻ってきた病室で、私は乾いた笑みを浮かべながらそう思った。友人と言えど、家族と言えど、所詮他人は他人に過ぎないということを痛いほど理解させられた。あいつらに、私の気持ちなんて分かるはずがない。そう吐き捨てるように呟きながら、視線を下に向ける。視界に入るのは、私には不釣合いなピンク色をした寝間着。その左側には、本来あるべきはずのふくらみが存在していない。つまり、私には、左足が、ない。

人が百人近く死んだ大事故だった、というのは目が覚めて早々に聞かされた。稀に見る大規模な脱線事故。先頭二つは完全にぺちゃんこ。後続車両もぐちゃぐちゃ。悲鳴。泣き声。助けを求める声。瓦礫の音。煙。さっきまで人だったモノ。その欠片。血の匂い。現場はさながら地獄絵図。

そんな電車の四両目に乗っていた私は、奇跡的に一命をとりとめた。ただし、左足を失うことで。

走ることが好きだった。否、走ることだけが好きだった。

自分を追い詰めていく緊張感。ある一線を越えた瞬間に訪れる高揚感。何もかもを忘れられるような陶酔感。趣味らしい趣味を持っていない私にとって、走ることは唯一のそれと言えた。小学校では、毎年リレーの選手をやっていた。中学になってからは、本格的に陸上を始めた。当然、挫折も味わった。それでも、ひたすらに楽しかった。大会にも出場した。記録に残るタイムを出せた。ライバルもできた。日々が充実していた。希望に満ちていた。足を自分の相棒といえるほど、誇れるようになった。

そんな、思い出話。私はけらけらと感情のこもっていない笑いを浮かべる。

それが今ではどうだろう。その片方を失った私の足は、もう走ることはおろか歩くことすらできない。親には義足を勧められたが、無機物をつなげるなど私にはとてもじゃないが我慢できない。それに、そんな代替物をつけたところであの希望はもう戻ってこない。同じように走ることはもう二度とできない。直面している事態を、何度も何度も反芻する。否定しようとしても、空虚な感覚が嫌でも事実を突きつけてくる。

ぼんやりと、それでいてひどく冷淡な頭で思う。走ることのできないというのは、私には、意味を、意義を、意志を失ったことと相違ない。吐き気が、する。不完全な足を付けているという事実に、眩暈さえする。これ以上、耐えられる自信がない。こんなものは、つけていたくない。

私は悲壮と期待が混在した視線を右足に向けると、棚の上の果物ナイフを手に取った。

気がついたら、自分は担架で運ばれていた。両側には担当医と両親がいて、私にヨクワカラナイコトを怒鳴りつけている。なんだかやたらとおかしくて、自然にくすりと笑みがこぼれた。自分でも興奮しているのが分かる。私は期待感をこめて、自分の片割れだったものを見やった。そこにはペンキをぶちまけたように真っ赤に染まった寝間着と、ナイフでひたすらずたずたに切りつけられた右足があった。

# 「歩」本選Ａブロック作品講評

今週から、イチオシフレーズ欄に言及のあったものは、すべて掲載することにします。
たったひとことが、だれかの心に止まったら、それもまた、たいせつな記念碑だと思いますので。

## １　歩く喜び　9位　2ポイント

「初めて歩いた赤ちゃんは……」のくだりで、ぽっと心が明るくなります。
「歩」にきちんと焦点をしぼって、短いながらもメッセージ性のあるフレーズたちが、今週の表紙を飾ってくれました。

## ２　昼下がり　5位　8ポイント

サッカー少年とのつかの間のふれあいを通して蘇ってくる昔の記憶。共感を誘うすなおな展開で引き込まれます。
ラスト、できれば「少年がんばれ」と人まかせで終わらず、自分自身を見つめ直す何かをほんのり感じさせていただくと、より良かったか。
イチオシフレーズ：「オリンピック」　→ワールドカップにしたかったね。

## ３　あるかぶとむしの訓、辞　3位　14ポイント

すてきすてき。１１×９歩に感じるやすらぎ。言われて気づく人間視線の尊大さ。
人生、もとい虫生を肯定的にとらえる「めたびー」君のお話は、イヤミがない口調なので、すなおに聞けて、ここちよく降参です。
それにしても「訓、辞」の意味をみんなでいっしょうけんめい考えたのに単なるタイプミスだったなんてそんなあんまりな。目立ちすぎて気づかない？
イチオシフレーズ：「めたびー」「触覚の角度」

## ４　この大学で、今あたしは。　4位　11ポイント

「光」というたとえを用いることで、かなってしまうと消えてしまう別のもの。葛藤、無念、乗り越えての今。引いた視線でたんたんと描ききって、すばらしいです。
べたべたの恋愛ドラマになってしまいがちの設定なのに、一人称も「あたし」とベタなのに、こんなにもからりと乾いた風を吹かせることができるなんて。ひのうえ、日蝕、やはりこの作者さんには、明るいものが似合うのか？

## 5　漢字クイズ　9位　2ポイント

グレイトな作品が続きます。
メッセージでもなく、ストーリーでもなく、発想力のみごとさで勝負。よくも見つけたなあと、そして、よくもここまで作り込んだなあ、と答えにたどりついたあと、しばらく唖然でした。
イチオシフレーズ：「もう、わかりましたね」「□歩き」

## 6　歩　12位　0ポイント

人生を歩みにたとえて、というのは、今回、わりとよく見られたパターンですが、これは力尽きて倒れるのではなく、受け継ぐ、という終わり方が明るくて良かったです。
「真っ白な暗闇」の意味をお茶会で作者さんに伺ったら、先のわからない未来を「白」で表現されたかったんだそうな。なるほど。ちゃんとイチオシフレーズに選んだ班もありました。
イチオシフレーズ：「ボクは　今　歩いている」「真っ白な暗闇」「生まれた時から続く足跡を見て自分の存在の温かさを得る」（温かさってスゴイなあ、とコメント付き）
ということで、票は入らなかったけれど、今週のイチオシフレーズ大賞を受賞しました。おめでとう！

## 7　「歩」の風景　1位　17ポイント

より凝ったポエム・スタイルへ。
てくてくてくてくてく、雨ニモ負ケズの賢治師匠の羅列調の言葉のリズムを巧みに写し取って、自分のリズムを作り上げた技に乾杯です。ハイレベルの混戦を制し、一票差での首位、おめでとう!!
イチオシフレーズ：「歩く、歩く、歩く、歩く。」「道路の白いライン上だけを歩いてみたり」

## 8　それは間違っている　5位　8ポイント

重い問いかけを、ギリギリギリギリと自分自身を追い込むように思考をめぐらせ、親しみやすい比喩やネタをうまく差しはさみつつ、ずしりと着地。ビートたけし的視線とでも言いましょうか。「正統派！」（A-9班）「ものすごい同感」（A-5班）などフロアでも評判でした。希少な論客、次回もぜひ鋭い匕首（あいくち）を読み手に突きつけてくださいませ。
イチオシフレーズ：「そうじゃない」「メガネの人に対する違和感のなさ」

## ９　歩道橋 9位　2ポイント

　とても実感のこもった歩道橋の思い出話。映画の主人公のように、のくだりなんて、特に「あるある」と実感を誘うのでは。
　ラストの「見上げる」の意味が謎でしたので、作者さんに伺ったら、車を運転する光景、だそうな。
　イチオシフレーズ：「飛び降りて」

## １０　片割れ 2位　16ポイント

　赤ずきんちゃん、自己分析が済んで、病院へ行く？
　トリックやレイアウトの妙が光った前２作と変えてきたところが、さすが王者です。
　状況のシリアスさがほんとに真に迫って描かれていて、だからこそ、不完全なモノは要らないと暴発するまでの気持ちの流れにしっかり寄り添え、ダークな気分に浸れました。

## １１　競歩～Race Speed Walking～ 7位　5ポイント

　あの、そこはかとなくユーモラスな競技姿勢が印象的な「競歩」という種目に焦点をあて、ある出会いを機にその魅力を語っていただきました。
　ていねいに描かれてはいるのですが、競歩の良さをアピールするなら、ルールやみどころを、もっと積極的に紹介したほうが良かったのでは。

## １２　猫 7位　5ポイント

　猫に化けた僕の過去。なにやらゲド戦記のような印象。
　最初はふつうの猫かなあ、とかわいらしさでするする引き込まれて、ラスト、小さな髭を一本、読者にもチクリと刺して去る。不思議気分の展開で、なんだったんだ今のは？　と煙に巻かれつつ、しっかりファンタジー気分を味わわせていただきました。
　もうちょっと伏線張ったほうが良かったですかね～と、お茶会で作者さんに相談されたのですが、いえいえ、こういうフシギ物は過度な説明はヤボなだけなのでは？